日本語における代動詞
―「する」と「やる」に見られる代示性―

大　塚　　望

要　旨

本稿は代動詞の定義を再検討し，狭義の代動詞を「先行テクストの中にある動詞の代わりとして用いられる動詞」，広義の代動詞を「先行テクストの代わりとして用いられる動詞」とした。そして，「日本語日常会話コーパス CEJC」を用いて「する」と「やる」の代示性を調査した。その結果，両者の代示の範囲は動詞一語，句，節，文と幅広く，前文脈をそのまま代用する場合と前文脈を内容的にまとめたものを代用する場合とが見られた。また，指示語と一語化して用いられることがわかった。一方，両者の相違は指示語を伴う代示の多少（する＞やる）であり，それは各動詞の形式性，意味の希薄性による。また，代動詞の範囲は限定的であることもわかった。

キーワード　代動詞　代示　代用　する　やる

1．はじめに

日本語の「する」は，実質的意味がなく専ら文法的な機能を果たす動詞とされ，「形式用言（山田 1936）」「形式動詞（松下 1930）」「機能動詞（村木 1991）」と呼ばれる。一方で，実質的意味を持つ他の動詞の代わりとして用いられる「代動詞」という用語が存在する。英語学では代動詞という用語を用いた「do」の研究がなされているが，日本語では代動詞という用語は「する」の研究で用いられることはほぼない[1)]。「する」は意味が希薄であるという特性により，様々な意味・用法を持つに至った動詞だが，その特性は代動詞の機能をも果たす形に発展しているのだろうか。そして，そもそも代動詞とは一体どのような動詞を意味しているのか。

そこで，本稿では代動詞の定義について検討し，「する」が代動詞としての機

能を有するか検証したい。また,「する」の類義語である「やる」についても比較しながら考察する。そのことにより，形式動詞・機能動詞「する」の機能について更に考察を深め,「やる」との相違[2)]についても改めて論じることにしたい。

２. 代動詞とは何か

代動詞の定義について，先行研究を元に考察する。

2.1. 代動詞の辞書的定義

まず，いくつかの辞典で代動詞の定義を確認する。

Pro-verb《代動詞》：他の動詞の代わりに用いられる動詞。通常は，前に用いた動詞の反復を避けるために用いられる特定の動詞。例：英語　Who wrote the diary?---Anne *did*.『現代言語学辞典』p537

Pro-verb　代動詞：実質動詞の代わりに用いられる動詞形。たとえば，英語では do のさまざまな形式が次のように代動詞になる。A: I like coffee. B: I *do* too. /So *do* I. /Alan *does* too. A: She broke the window. B: So she *did*.『ロングマン言語教育・応用言語学用語辞典』増補改訂版 p380

以上のように，代動詞は「他の動詞の代わり」「実質動詞の代わり」という定義がなされている。このことから，代動詞は形式的な動詞であること，そして，他の動詞の反復を避けるために用いられることが特徴であることがわかる。

ちなみに，代動詞の定義が掲載されているのは，上のような様々な言語を想定した一般言語学の辞典であり，日本語を対象とした辞典類には代動詞の記載は見られなかった。筆者が確認したものでは,『日本語学研究事典』『日本語学大辞典』『日本語文法事典』『応用言語学事典』『新版日本語教育事典』には，代動詞の記載はない。

2.2. 本来使われる動詞の代わり

日本語の「する」と他言語の類義表現を比較した研究の中で,「する」が代動詞であるとするものがある。その一つである瀧口（2005：2）では,「代動詞としての『する』」は「先行要素に実質的名詞，つまり動作性・状態性の意味が全く認められない名詞が来た場合」であるとし，具体的には「日本語の『イヤリングをする』の『イヤリング』が実質的名詞に当たり,『する』は本来使われる動詞『付ける』の代わり，或いはその意味を担う代動詞と判断できる」としている。宮岸（2007）もほぼこれを踏襲している。これらの研究では，代動詞とは「“本来使

われる”動詞の代わり」と考えられている。

辞典の定義と瀧口（2005）の定義を比べると，「他の動詞の代わり」という点が共通であるが，その内容は異なっている。前者は対話中つまり「文脈あり」における他の動詞の代わり，後者は「文脈なし」における他の動詞の代わりと見ることができる。果たして，どちらも代動詞と捉えるべきか，あるいは別と考えるべきだろうか。

本稿ではこれを別と考えるべきとしたい。なぜなら，両者は根本的に異なるものを指していると考えられるからである。

「する」という動詞は，本来使われる，何か別の動詞の代わりとして存在するのではなく，そもそも本来の姿が形式的なのである。例えば，「実家は美容院をしていて，母は毎日店で立ちっぱなしだ」という文は，「して」の部分に「経営して」「営んで」という意味を汲むことができる。しかし，それは，「経営する」「営む」という実質動詞の代わりなのではない。生業や職業関連の名詞をヲ格に立てることで，そのヲ格名詞に実質的な意味の中心を担わせ，動詞部分は（それにより一定の意味が生じる場合もあるが），基本的には文法的働きを示す動詞であるというのが「する」の本質である。このことは，動作性の名詞がヲ格に立つ場合（例，立ち見をする）やサ変動詞（例，協議する）を想起するとその典型を見て取れる。また，逆に，動作性の意味が全く認められない名詞が前要素として来た場合でも，「する」という動詞部分のみに「代わりである」とする実質動詞を想定することができない例は多くある。例えば，「父は教師をしています」の「している」は「務めている」と置き換えると不自然であり（？父は教師を務めています），「野球をする」「かるたをする」「１万円する」の「する」は「本来使われる動詞」を想定することは難しい。それは，言わば「野球をする」全体で一つの述語のような働きを示す動詞であると考えられるのである。そして，以上のような特徴を持つが故に，形式用言（山田 1936），形式動詞（松下 1930），機能動詞（村木 1991）規定されてきたわけである。したがって，このような文脈を前提としないも場合における他の動詞の代替性[3)]は，代動詞の定義から外れるとみるべきであろう[4)]。

2.3. 英語における代示表現

安井・中村（1984）は，英語における代示表現（substitution）について詳細に考察したものであり，その中で動詞の代示表現として「do」を取り上げ論じている。まず，代示表現とは「テクスト内の作用であって，ある表現の代わりに他の

表現を当てる文法的表現手段（p26)」とする。ここで，他の代わりになる現象はテクスト内であると明言し，先に述べた辞典の定義がより明確になっている。さらに，「動詞の代示 do は，先行テクスト中で主要語動詞としてすでに用いられた動詞と同じ動詞を反復使用する代わりにそこに置かれるチップ（p131)」だと述べ，先行テクストにある動詞の代わりとして同じ主要部に置かれると分析する。あくまでも，テクスト内における他の表現の代わりを代示あるいは代用としている[5)]。

以上，代動詞とは何かについて整理した。ここまでの考察を一旦まとめるならば，代動詞とは「先行テクストの中にある動詞の代わりとして用いられる動詞」ということになる。なお，本稿における「テクスト」とは，文脈（コンテクスト）の中でも「言語形式を伴って実現する」コンテクストのことを指す。したがって，暗黙，前提，含意のような背景化する情報や内容については含まないものとする。

3.「やる」に関する先行研究

「する」の類義語である「やる」の「代替」[6)] 機能について言及したのが，國弘（2007）である。國弘（同）は，話し言葉における「する」と「やる」の使用の相違を明らかにすることを目的に，ラジオ放送の話し言葉を分析した。その結果，「実質動詞の代替」，「前発言の代替」としての「やる」の使用が見られたことを報告している。その指摘は概ね妥当と言えるが，用例が少ないこと，用例に前後の文脈がほとんど示されないこと，「前発言」とされる「実質動詞一語よりも広い代替」の範囲はどこまでなのか明らかにされていないことなど，いくつかの課題を見出すことができる。

また，一方の「する」についてはほとんど述べられておらず，「『する』にも動詞の代替となる用法は存在する（p55)」とされた例（じたばたする）も，代動詞とは言いにくい。そのため，「する」の代動詞の働きについて明らかにする必要がある。

4. 目的―代動詞と代示性―

以上，代動詞の定義と「やる」に見られる代替について先行研究を検討し考察した。再び，ここで代動詞の定義を論じ，本稿の目的について明示したい。

まず，代動詞とは「先行テクストの中にある“動詞の代わり”として用いられる動詞」と一旦定義した。しかし，この定義には代動詞が「動詞の代示」であるという限定，縛りがある。つまり，この定義に則るならば，「動詞の代示」であ

る以上, 原則的に先行詞（代動詞が指し示す内容や要素）は「動詞一語」である。これを談話で考えるならば，ある動詞が談話のやり取りの中で別の動詞に置き換わるということになる。確かにそのような現象は見られ，まさに代動詞という名称に合致するが，談話の展開や言語の経済性という面から見るならば，一語が別の一語に代わるだけなら, そこに利便性はあまりない。効率的な展開の仕方とは，つながりを維持しつつ長い繰り返しを避けることである。そう考えるならば，一語より大きい単位の先行詞があり，それを引き継ぐというような働きこそ，テクスト展開に見られる代動詞の特徴だと考えられるのである。そして，そのような動詞の存在を見出すことは，代示性というより大きなテーマにおいても重要である。したがって，本稿では先行詞の範囲を広げ，動詞以外の先行テクストの要素や内容を引き継ぐ働き，テクストの中で何かの代わりになる現象全体を考察していくことにしたい。つまり，代動詞だけでなく，代用表現，代示表現と考えられる点についても取り上げることにする。

ここで代動詞についてまとめるとすれば，その狭義的定義は「先行テクストの中にある動詞の代わりとして用いられる動詞」であるが，広義的定義は「先行テクストの代わりとして用いられる動詞」ということになる。

本稿では, このような代動詞としての機能を「する」と「やる」が有するのか，どのような代示性あるいは代用性を示すのかを明らかにすることを目的とする。なお，内容の引き継ぎやテクスト内の代示性を検討するためには，複数の人との対話である方が実例を見出しやすい[7)]。そのため，今回は,「日本語日常会話コーパス（モニター公開版）CEJC」を用いて実例にあたった。

5.「やる」の代示性

先行研究でも指摘のあった「やる」の代示性について考察する。以下，実例[8)]を示しながら論じる。

5.1. 動詞一語の代用

（1）# 徳正なんか（略）# 照り焼きよりねブリ大根みたいなやつが好きなの（略）# 魚だって焼くし # うん # 調理するもん # え # 自分で # うん # 捌いたりするの # 捌くまでは # あーあー # 釣ってこないから駄目よ # そうだよね # そこまでできたらすごいよ # うーん # ありがたいけどね # うーん # でもありがたいよ # 結構なんでもやるから # そうだよね（略）# なんかコこれはどうやったら味付けしたらいいかとかってユ聞くしね # 絶対やらな

いもんね＃あー＃あー＃そう＃だからさうちでもさ何か一つぐらいできなきゃ困るよっつってんだけどさいざとなったらできるんだとかゆってさ絶対やらないの＃まあ興味がないんだったらしょうがないじゃん＃うーん＃コンビニで買ってきたほうが自分が作るよりも材料費かからなくていいかもしれないし（C002_016, 119240）

この例は，二人の女性が自分達の子供が料理をするか話している場面である。「やる」「やったら」「やらない」は動詞「調理する」の代用と考えられる。つまり，先行詞は「調理する」の動詞一語であり，狭義の代動詞の定義に合致するものである。また，統語構造上，主要動詞の位置を変えず，そのままの構造に当てはめるという意味では，このような動詞一語の代用は典型的な代動詞という概念に最も該当する。

5.2. 句の代用

（2）＃釘＃抜けるのは抜いてほしかったな＃ほら次に新しい釘を刺すのにさ邪魔でしょう＃でも抜けねんだもん(略)＃さっきでもさ抜けるやつもあったんじゃない＃ない＃ありました＃普通にない＃だってだったらペンチ使うよ＃ペンチ使ってやる＃よし＃わかった＃君入れちゃったんならいいよ＃もう＃取れそうなのがあったらやるよ＃うん（K004_007, 11420）

この例は，３人の人物が釘を抜くかあるいは叩き込むかについて作業をしながら話している場面である。ここに「やる」が２回出てくる。前テクストを確認すると，これらの「やる」は「釘を抜く」あるいは「抜く」の可能性がある。この「やる」は語の代用なのか，あるいは句の代用なのだろうか。

「やる」が「抜く」だけを代示するならば，対象である「釘」を立てて「釘をやる」という表現にすることも可能なはずである。そこで，これを会話に戻すと「ペンチ使って釘をやるよ」となるが，これは不自然な表現あるいは非文である。そのため，実例が「ペンチ使ってやるよ」となっているのは，単に「釘を」が脱落しているわけではないと考えるべきである。したがって，この「やる」は「釘を抜く」という句単位が先行詞となっている例であり，「やる」の代示性は動詞一語だけでなく，句の単位も可能であることがわかる。

5.3. 節の代用

（3）＃ム昔はよくおうちで採れてたけど＃今採れないとかでなんか食べたくなっちゃうみたいな＃懐かしい気持ちでやっぱり（略）＃デーデ何出た

時に食べないとってゆうのがあるのかしらね（略）＃新物初物をね食べたいってゆうね＃ね＃結構年配の人は多いですもんね＃うーん＃なんか＃うーん＃ニ煮てくれたの食べたいんだけどな＃うんうん＃でもなんかああゆうのをやったのってゆう記憶があってもう一回それをやりたいってゆう懐かしさなのかしらね（略）＃やっぱり毎年やることにきっと何か価値があるんですよ＃あー＃ありますか＃毎年やることって＃あんまりなかったんだけど＃なんか＃最近うちもタケノコもらうもんだからうんやるけれど＃（略）＃でもあんまり毎年やらなきゃいけないって思うことないかな（C002_015242640）

この例は，昔の慣習について話している場面である。「ああいうのをやった」「それをやりたい」＝「初物を煮て食べる」という前テクストの内容が引き継がれている。これらは，指示語が先に来て，次に「やる」が続くという「指示語をやる」の構造を持つが，これを分割して「ああゆうの」と「やる」，「それ」と「やる」の２つの要素に分けても，それぞれに該当する要素を指摘することはできない。例えば，「ああゆうのを好む人はいるね」という文をこの談話に挿入した場合，「ああゆうの」は指示対象として「初物を煮て食べること」であり，「好む」という動詞は実質的な意味を有している。そのために，指示語と動詞部分は全く独立した別の単位として認めることができる。しかし，「ああゆうのをやる」の場合は，それぞれの部分に具体的なものを当てはめることはできない。「ああゆうのをやる」全体で「初物を煮て食べる」を意味し，指示語と動詞は意味的にも統語的にも強く結合したものと考えられる。そのため，このような「やる」は通常の実質動詞とは異なると言える。つまり，「指示語をやる」は一体化して，前文脈の「初物を煮て食べる」を代用していると考えるべきである。

次に，「毎年やる」がそれぞれ別の人物の発言として出てくるが，これも「初物を煮て食べる」ことの代わりである。さらに，その後に出てくる「タケノコもらうもんだからやるけれど」の「やる」は，それまで引き継いできた「初物を煮て食べる」ではなく，単に「煮る」という動詞一語だけの代わりとなっている。そして，最後に出てくる「毎年やらなきゃいけない」は，直前の「煮る」ではなく，その前に話題に出た「初物を煮て食べる」の代わりに戻っている。このように，「やる」は先行詞を変えたり戻ったりしながら代示の機能を果たすことがわかる。

以上，（３）の例からは，動詞一語の代用，前文脈に出てくる内容をまとめた節単位の代用が見られた。また，特筆すべき点は「指示語をやる」が一語化して，

代示の機能を果たす点である。

5.4. 文の代用

（4）＃だから事前にヨヤほしい人は予約取って色まで決めてもらっちゃえば自分の好きな色が作れるし＃うん＃うん＃うん＃サイズが足りないとかゆうこともないのでやったわけ（T015_015, 56250）

これは，地域の行事で上着を作って売ったことについて話している場面である。「やった」は「事前に（上着が）欲しい人は予約を取って色まで決めてもらう」を代用していると考えられる。このように「やる」は文単位の代用も可能である。

5.5.「やる」の代示性―まとめ

以上，「やる」の実例を元に考察した結果，その代用・代示の範囲は，動詞一語，句，節，文と幅広いことがわかった。また，代示の在り方としては，前テクストをそのまま代用する場合と，前テクストをまとめて内容的に代用する場合とが見られた。また，特筆すべきは「指示語やる」[9)]が一語化して，代示の機能を果たす点である。

6.「する」の代示性

先行研究では指摘のなかった「する」の代示性について考察する。

6.1. 動詞一語の代用

（1）の一部を再掲し，ここに出てくる「する」について考える。

（1）＃調理するもん＃え＃自分で＃うん＃捌いたりするの＃捌くまでは＃あーあー＃釣ってこないから駄目よ＃そうだよね＃そこまでできたらすごいよ＃（略）＃うーん＃でもありがたいよ＃結構なんでもやるから＃そうだよね（略）＃なんかコこれはどうやったら味付けしたらいいかとかってユ聞くしね＃絶対やらないもんね＃あー＃あー＃そう＃だからさうちでもさ何か一つぐらいできなきゃ困るよっつってんだけどさいざとなったらできるんだとかゆってさ絶対やらないの（C002_016, 119240）

ここに「する」の可能形である「できる」が単独で三回出てくる。この「できる」は，「やる」の可能形「やれる」でも置き換え可能であり，いずれも先行詞「調理する」を意味することがわかる。形態が可能形に変化しているが，テクスト内から代示するという機能を示すものと捉えていい。つまり，他の動詞の代わりとなって同じ位置に置かれるという狭義の代動詞に該当する。

6.2. サ変動詞の代用

ここでは，サ変動詞が「する」によって代示される例について考察する。

（5）＃なんかね雪かきして妊娠中に雪かきしてすごいお腹痛くなったのはすごい覚えてるんで＃雪の多い年だった＃やだ＃うん＃そんな＃よくないよ＃だめだよ＃もうもう二度としないと思って＃うーん＃今年は雪降らないといいなと思うんだけど＃降ってもやらない（T008_017b　47910）

この例は，女性同士が雪かきについて話している場面である。この会話の中に「する」が「もう二度としない」という形で出現する。「もう二度としない」は，前文脈の「雪かきする」を代用して「もう二度と雪かきしない」を意味しているが，ここには二つの可能性がある。一つは，「雪かきする」の「雪かき」が脱落あるいは省略されて「する」が残り，その否定形「しない」が出現した。もう一つは，「雪かきする」全体を代用して「する」となり，その否定形「しない」が出現した。このように，サ変動詞は「語幹」と「する」に分割できるため，語幹が脱落した「する」なのか，あるいは，「語幹する」全体を引き継いだ「する」なのかという二つの可能性が考えられるのである。そして，前者であれば代動詞ではなく，後者であれば代動詞である。したがって，この点について考える必要がある。

さて，「もう二度としない」という表現は，「やる」でも置き換えが可能で「もう二度とやらない」と変えても問題はない。実際に（5）の末尾には「降ってもやらない」という表現が見られる。そして，「降ってもやらない」の「やる」がテクストの中で何を代用しているかと言えば，それは「雪かきする（雪をかきのける）」である。そうであれば，「もう二度としない」の「する」もまた「雪かきする」を代示していると考える方が自然である。「雪かきする」というサ変動詞の実質的意味は，語幹である「雪かき」にある。「する」の代示性は，その「雪かき」という実質的意味を引き継ぎながら，短い音の構成「する」で効率的に「雪かきする」全体を引き継ぐというところに意義があると考えられるのである。したがって，サ変動詞の語幹が脱落したのではなく，サ変動詞全体の代わりになっているのが「する」である。

もう一つ，例を確認する。

（6）＃免許＃車＃いやいや＃そりゃ平気＃だいじょぶ（略）＃まあ視力検査もさイ適当だよ＃だあんなのさ左とか右とかって当たっちゃってる場合があるから（略）＃何眼鏡と言ってたってあれコンタクトしたらわかんな

いでしょ（略）＃わかんない＃まあしてませんてゆっちゃえばね（略）＃結局あいい加減だもんね＃ね＃あんなのね＃うーん＃してますかって聞かれるだけだから＃そう＃してないですとかしてますってゆったらその人の＃してませんてゆわれたらそれまで（T015_017, 48270）

この例は，免許更新のための視力検査について話している場面である。「コンタクトする」が「する」だけで次々と引き継がれている。もし「コンタクトを付ける」で談話展開したとしたら，「あれコンタクトを付けたらわかんないでしょ」「まあ付けてませんてゆっちゃえばね」「付けてますかって聞かれるだけだから」となり，この場合は「コンタクトを」が省略されていると考えられる。なぜなら「コンタクトを付ける」は「コンタクト」「を」「付ける」という独立した三つの要素だからである。しかし,「コンタクトする」は一つの動詞である。あるいは「コンタクト（を）する」という三つの要素だとしても，これら三つはそれぞれ独立した要素とは考えられない。それは,「コンタクト」は単独では物を指す名詞だが,「する」という実質的な意味が希薄な動詞と共起することによって，両者は複合的な意味を生じさせている。それ故に,「を」という格助詞を伴ってはいるが,そこに動作の対象という役割はない。つまり,「コンタクトをする」の三つの要素は複合的に一つの述語として成立している。これは機能動詞（村木 1991）とされた理由である。

したがって，一つの動詞（サ変動詞）あるいは一つの述語（機能動詞結合）が「する」に代用されたと考える理由は，このような「する」自体の特異性にある。ちなみに，これら「雪かきする」「コンタクトする」は本来ヲ格があるのが規範的だと感じられるが，自然会話の実例にはこのように一語化して用いられる例も多い。

以下に，サ変動詞を代示する例をいくつか挙げておく。このようなサ変動詞を「する」で代示する例は非常に多い。

（7）＃広瀬さん料理とかされるんすか＃ほとんどしないね＃へー＃たまにたまにこうする＃たまにするぐらい（T001_003, 83390）

（8）＃印刷でこん時にサイズＡ四でここで選べるんですね＃Ｌ四倍こんな感じでどうね＃トリミングされてないよね＃した＃した＃えコ黒ちゃんだよ＃したよ全部（K003_017, 21440）

（9）＃うーんえだって二十代の人とかもパックしたしたりとか普通にしてるんですよね＃今の子ってしてる＃してる＃してる＃十代とか二十代でしてます（C002_015, 156500）

（10）＃きのうブログは更新したんだっけ＃うん＃したよ（K003_014, 23690）

（11）＃昔はピーマンがだめだったな＃ええ何が味っすか＃あの意味がわからんのや＃味しないやん基本的に＃いや味しますよ＃しないやろ＃シーいやします＃ただの青臭いやつやんか（T001_003, 149500）

（11）は「味する」とあるが，本来は「味がする」であるため，規範的な判断ではサ変動詞ではない。「味がする」「音がする」「寒気がする」など「名詞がする」も語結合が強く，その関係が緊密なために一語として機能していると考えられる（大塚 2007）。そのため，「味（が）する」全体が「する」で代用されていると考えられる例である。

6.3. 句の代用

（12）＃じゃ一応じゃあんあじゃあ二十六日の地区委員会でえーっとキ議事録はきちんと取ったほうがいいと思うのでそうゆうふうにしたいと＃うん＃うん＃うん＃でつきましてはえー今までのように担当制にするか（T015_011, 23750）

（12）は地区での話し合いの場面である。「そうゆうふうにしたい」というのは「議事録をきちんと取りたい」ことを指しており，句単位の代用がなされている。

6.4. 節の代用

（13）＃ボーリングに間に合えば全員あれ着てボーリングやるつもりだったの＃いやいや＃ボーリングの最初は何かってゆうとボーリング大会ん時にあのサポート事業だから売ろうと思ったわけ（略）＃うんうん＃先に作っといて＃うん＃あーあーあー＃うん＃だけどそれするとなんてゆうのかなサイズが合うの合わねえのとかもあったり＃そうだよね＃余るもん出てくるよね（T015_015, 56250）

この例は，（４）の直前のやり取りの部分で，ボーリング大会で何か上着を作って売ることについて話している場面である。「する」は指示語と共に用いられて「それする」という表現になっている。「それをする」の「を」が脱落した形だが，何を代用しているかと言えば，前文脈の「（上着を）先に作っておく」だと考えられ，節単位の先行詞を代示する機能を有することがわかる。

6.5. 文の代用

(14) # それでみんなが住みやすい地域を目指してみたいなそんな感じにするといいね # そうしましょうか (T004_013, 122290)

(14) は地区の話し合いの場面である。「そうしましょう」は「みんなが住みやすい地域を目指してみたいなそんな感じにする」を代用しており，前テクストの文単位を引き継いでいる。

(15) # だって変にだって俺がじゃあ俺は雑用やんねえみたいになっちゃったらそれまた組織として上と下ができちゃう # そうはしたくなかった # わかるな # ってゆう年上だし # 立場的に # だからそれはしたくなかったんだけど (T010_013, 130950)

この例は部活における先輩後輩や部活のあるべき姿について話している場面である。「そうはしたくなかった」「それはしたくなかった」という表現が出てくる。「そう」「それ」が「組織として上と下ができちゃう」ことだとすれば，「そうはしたくなかった」は「組織として上と下ができてしまうようにはしたくなかった」，「それはしたくなかった」は「組織として上と下ができてしまうことはしたくなかった」となり，一見すると指示語と「する」は別だと考えてよさそうに見える。しかし，これも元々「する」が持つ働きによるもので，「指示語やる」で論じた通り，「指示語する」もまた一体化したものと捉えるべきである。なぜなら，上のように考えると「《(組織として上と下ができる) という動作》を《(する) という動作》」のような意味的な二重構造が生じてしまう。実質動詞の場合は，例えば「太郎を褒める」なら「《(太郎) という人物》を《(ほめる) という動作》」のように意味的に別個の要素が並ぶ。このように，「指示語する」は指示語がどのような形であれ，「する」と一体化して機能すると考えられるのである。したがって，これらの例も前テクストの文を代用していると考えられる。次も同様である。

(16) # その十九時の上にクローズドって書くのはどうしてもそうゆうふうに書かなきゃ普通に見てオープンは十時から十九時だよってわかるから普通お店ってそうなってるよねどこもなんかさ別にさ何時からえーっと十九時からえー朝のオープンのなんだ十時までがこう閉まってるってゆうふうには書いてないっしょ # どこも # うーんじゃもうそうしよ # うんいいよ (K003_003, 23870)

(16) はお店の看板書きについて話している場面だが，「そうしよ」は広く前文脈全体の意味内容をまとめて代用していると考えられる。これも，「そう」は一見すると「十九時の上にクローズドと書かず，十時から十九時とだけ書く」を指していると考えられるが，「そう」は副詞で様態を表すため，動作や変化までを

示すことはできない。そこで必要となるのが動詞だが，実質的な意味を持つ動詞を置くと意味の変化が生じてしまう。そのため，「そう」の指す意味内容をそのまま引き継いでただ述語の機能だけを示す動詞つまり，「する」が必要となる。つまり，この例は前文脈全体の内容をまとめた形で代用するものと言える。

6.6.「する」の代示性―まとめ

以上，「する」の代示性について実例を元に考察した。その結果，「する」についても動詞一語，サ変動詞，句，節，文の代示性が見られることがわかり，多様な形で内容を引き継ぐことがわかった。

7.「する」と「やる」の代示性の相違

「する」と「やる」に代示性が確認されたが，両者は全く同じように用いられているのだろうか。ここでは，両者の代示性の相違について考察する。

実例を確認していると，指示語が先行して「する」と共に用いられる例が非常に多いという印象を受けた。「する」が単独で用いられる代示用法は，動詞一語あるいはサ変動詞の代用である「狭義の代動詞」のみのように思われる。他は基本的に「指示語する」の形で出現する。一方で，「やる」はその限りではなく，単独使用の例が多い。以下の例を見てみよう。

（17）a. 君が言うから，｛? したんだ／やったんだ｝。

b. 君が言うから，｛そうしたんだ／＊そうやったんだ。｝

このように動詞単独の場合（17a）は，「する」が不可で「やる」が可である。一方，指示語を伴う場合（17b）は「する」が可で「やる」が不可になる。なぜこのような相違が生じるのか。

それは，「する」の「心許なさ」ではないだろうか。「する」は言わずもがな形式動詞の筆頭であり，「機能動詞の典型例（村木 1991）」とされる動詞である。つまり，その意味の希薄性は日本語動詞の中で最も顕著である。それゆえに，単独で使われると実質的な意味が希薄すぎるため，その存在が不安定になり常に何かそれを補う補語を要求する。それはこのような談話や文章の引き継ぎにおいても見られ，単独で使用するには不安定であるために，その意味するところを明示するために指示語の力を利用するのではないか。もちろん，指示語よりも先行詞そのものを用いる方が意味的には伝わりやすいが，効率や経済性を考慮すれば，指示語に置き換えることが望ましい。一方で，「やる」は「する」ほど形式的な動詞ではなく，これまで形式動詞と認定されたことはなく，機能動詞とされたこ

ともない。「やる」は「する」ほど指示語に支えられる必要がないと考えられるのである。例えば，以下（18）のように「やる」は指示語を伴うと意味的に重すぎる感がある。また，「そう」に様態の意味が強く出てしまう。

（18）あいつを懲らしめろって言っただろ？君が言うから｛やったんだ／？そうやったんだ｝。

以上をまとめると，「する」は動詞一語（サ変動詞含む）の代動詞の場合を除くと，指示語を伴うのが一般的な代示用法であり，「やる」は動詞一語の場合だけでなく，句，節，文と先行詞が広がっても，指示語を伴わず単独で用いることができる動詞である。その理由は，動詞の形式性，意味の希薄性によるものと言える。

8. 代示の限界

「する」と「やる」が代動詞として用いられることを見てきたが，これらの動詞は何でも代用できるわけではない。以下を見てみよう。

（19）遊園地に行く？　うん，｛＊やる／？そうする｝。

（20）お風呂に入りましたか。　はい，｛＊やりました／＊しました｝。

（21）ペットを飼ってるの？　うん｛＊やってる／＊してる｝。

（22）傷が痛みますか。　はい｛＊やります／＊します｝。

（23）笛を吹いてみますか。はい｛やります／？します｝。

（24）ちゃんと列に並んでますか。　はい，｛？やってます／？してます｝

（25）弟を叩いたでしょ。　え，｛やってないよ／？してないよ｝。

このようにいくつか作例してみても，代用できない動詞は多く，寧ろ代用できる動詞は限定的ではないかと考えられるのである。おそらく，「する」と「やる」が持つ意味・用法と関わって限定的になるのだと思われるが，その範囲については今後の課題としたい。

9. おわりに

本稿では，代動詞の定義を再検討し，狭義の代動詞を「先行テクストの中にある動詞の代わりとして用いられる動詞」，広義の代動詞を「先行テクストの代わりとして用いられる動詞」と規定した。そして，このような代動詞としての機能を「する」と「やる」が有するのか，どのような代示性あるいは代用性を示すのかを明らかにすることを目的とし，「日本語日常会話コーパス（モニター公開版）CEJC」を用いて実例にあたった。

その結果,「やる」と「する」は共に代動詞の機能を持ち，その代用・代示の範囲は動詞一語，句，節，文と幅広いことがわかった。また，前テクストをそのまま代用する場合と，前テクストを内容的にまとめたものを代用する場合とが見られた。そして，特筆すべきは，指示語と一語化して，代示の機能を果たす点である。

次に,「する」と「やる」の代示性の相違は,「する」が動詞一語（サ変動詞含む）の代動詞の場合を除くと指示語を伴うのが一般的な代示用法である一方で,「やる」は動詞一語の場合だけでなく句，節，文と先行詞が広がっても，指示語を伴わず単独で用いることができる点である。その理由は，それぞれの動詞の形式性，意味の希薄性による違いと考えられる。ただし,「する」と「やる」が代動詞として用いられると言っても，何でも代用できるわけではないこともわかった。

これまで日本語を対象とした代動詞の研究は管見のところ見られなかったが，本稿で考察した結果，代動詞の機能を持った「する」と「やる」が存在することを指摘することができ，形式動詞，機能動詞としての機能性について新たな知見を提示できたと考える。ただし，狭義的な代動詞とそれに関連する広域動詞や代理動詞などの動詞との相違など，日本語に当てはめた議論は今後の課題である。

注

1）管見のところ，唯一あった先行研究は木村（1993）の「代動詞『する』の用法について」である。これは自然言語処理に寄与するための言語分析が目的であり,「一般の動詞と一線を画すべき用例（p695)」についてその格パターンを中心に記述したものであるため，代動詞の研究にはなっていない。「行為・現象の範囲がきわめて広範囲で特定しにくいものを代動詞と呼ぶのは不適切であろうか（p684)」と述べるに留まっている。

2）これまで「する」と「やる」の相違を明らかにすべく研究を続けてきた（大塚 1999，2002，2006，2009，2010，2014）が，本稿はそれらを踏まえながらも両者の相違を新たに代示性の観点から明らかにするものである。

3）筆者は，他の動詞との置き換えを手段に，機能動詞と実質動詞のどちらの性質を持つかということを検証したことがある（大塚 1999)。これは，他の動詞の代わりであることを述べたものではなく，動詞部分に実質的な意味が残されているか，あるいは,「名詞＋する」という語結合の中でしか意味が生じないようなものであるかどうか，つまり，機能性の強弱を測るために意味的な側面に着目したものである。

4）安井・中村（1984）でも,「動詞の代示形 do が，普通動詞の do，広域動詞の do，代理動詞の do，助動詞の do などの do から，どのような点で区別されうるか」につい

て見出しを立てて論じている。

5）英語学における代動詞の研究はこれまで多くの知見が積み上げられていると推察される。本稿は，日本語の分析，とりわけ「する」と「やる」について具体的に論じるため，英語の do との対照研究はその目的にはない。そのため，代動詞の定義についてのみ援用することにしたい。

6）「代替」という用語は國弘（2007）で用いられたものである。國弘（同）では，代動詞という用語は使用していない。

7）話し言葉だけに代示性を示す用法があるということではない。文章や書き言葉においても動詞の代示性は見られると考えている。

8）例を提示する場合，（ID，開始位置）の順番で番号を付しておく。また発話単位の区切りは # で示す。なお，前後の文脈を示すために引用が長くなっているが，相づちなど内容に直接影響しないところは一部省略した。二重下線は先行詞，下線は代動詞，点線は前接の指示語に引いた。

9）「指示語をやる」だけでなく，「そうやる」のような「指示語やる」も同じく一語化しているため，ここでは「指示語やる」を代表として用いる。「指示語する」も同様である。

参考文献

大塚望（1999）「『する』と『やる』―生理・病理現象の表現を中心にして―」『言語学論叢』18，pp39-52，筑波大学一般・応用言語学研究室

―――（2002）「『する』と『やる』―非動作性名詞がヲ格に立つ場合―」『日本語科学』12，pp7-28，独立行政法人国立国語研究所

―――（2006）「行為動詞『やる』の俗語性」『創価大学日本語日本文学』16，pp33-41，創価大学日本語日本文学会

―――（2007）「『する』文の多機能性―文法的機能―」『創価大学日本語日本文学』17，pp23-39，創価大学日本語日本文学会

―――（2009）「擬音語・擬態語と『する』の結合について―『だ』『やる』との違いを中心に―」『創価大学日本語日本文学』19，pp17-36，創価大学日本語日本文学会

―――（2010）「サ変動詞語幹＋ヲ『する』『やる』―統語論的観点から―」『新潟大学国語国文学会誌』52，pp14-24，新潟大学人文学部国語国文学会

―――（2014）「初級日本語教科書における『する』と『やる』」『創価大学日本語日本文学』24，pp15-33，創価大学日本語日本文学会

加藤和男（1987）「英米語の代動詞 Do について」『岩手医科大学教養部研究年報』22，p113-122，岩手医科大学教養部

木村睦子（1993）「代動詞『する』の用法について」『国語研究』pp694-714，松村明先生喜寿祈念会編　明治書院

國弘保明（2007）「話し言葉に於ける「する」と「やる」の使われ方の相違について」『拓殖大学日本語紀要』17，pp.49-60，拓殖大学国際部

瀧口恵子（2005）「日本語『する』動詞と韓国語『ha-da』動詞に関する考察―代動詞と

しての用法を中心に―」『徳島大学国語国文学』18，pp.1-6，徳島大学国語国文学会
藤本真理子（2018）「『擬音語・擬態語副詞 ~ ト + 代動詞』の基礎的研究」『尾道市立大学芸術文化学部紀要』18，pp.129-134，尾道市立大学
松下大三郎（1930）『標準日本口語法』中文館書店
宮岸哲也（2007）「日本語の『する』とシンハラ語の『karanawaa』について」『国語国文論集』37，pp.1-8，安田女子大学日本文学会
村木新次郎（1991）『日本語動詞の諸相』ひつじ書房
安井稔・中村順良（1984）『現代の英文法第 10 巻　代用表現』研究社
山田孝雄（1936）『日本文法学概論』宝文館
鷲山 真澄（1993）「代動詞 DO の考察」『情報処理学会研究報告』93（79），pp.9-12，自然言語処理研究会

辞典・辞典

『応用言語学事典』小池生夫（編集主幹）研究社（2003）
『新版日本語教育事典』日本語教育学会（編）大修館書店（2005）
『現代言語学辞典』田中春美（編者代表）成美堂（1988）
『日本語学研究事典』飛田良文（主幹）・遠藤好英・加藤正信・佐藤武義・蜂谷清人・前田富祺 明治書院（2007）
『日本語学大辞典』日本語学会（編）東京堂出版（2018）
『日本語文法事典』日本語文法学会（編）大修館書店（2014）
『ロングマン言語教育・応用言語学用語辞典』増補改訂版　ジャック・C・リチャーズ／リチャード・シュミット（編）南雲堂（2013）

コーパス

日本語日常会話コーパス（モニター公開版）CEJC　国立国語研究所

（おおつか・のぞみ，創価大学文学部教授）